

もの言う牧師のエッセー 第137話

「このたびのノア/ Noah」

アメリカでは子供に男女の別なくノアと名づける親が多い。人気の理由は言うまでもなくノアの“パイオニア性”であろう。体制に迎合することなく途方もない大事業を一人で成し遂げ、“新世界”を切り開き新しい人類の礎となるといった、スティーブ・ジョブズや“アイアンマン”の様な、典型的な孤高のアメリカンヒーローに見えてしまう。この度のノアは聖書学的には全く頓珍漢ではあるものの、ストーリーの荒唐無稽さと登場人物それぞれのアクの強さが反映され、いかにもハリウッド映画らしい仕上がりだ。しかし実際のノアの物語はそんな単純な話ではない。

ノアの箱舟の残骸は、聖書の記述どおりトルコのアララテ山付近で「見つかった」と1世紀以上前から言われて来たし、人工衛星でも確認されたという情報さえあるが信憑性は低い。むしろ残骸のせいで箱舟の持つ意義が「私は幽霊を見た・見てない」型の低俗な好奇心に取って代わった観さえある。だが、創世記1章からノアの登場する6章までの一連の流れを見れば、現代科学が無視してきた構造的な事実がある。それは地質学や地球環境、気象学など色々あるが、最も顕著な例の一つは“鉄”の存在ではなかろうか。したがってこの度の映画において鉄器が描かれていたことは評価出来る。

周知の通り鉄の発明はBC1500年前後とされており、発明者されるヒッタイト人は預言者モーセと親戚にさえなっている。だが映画でも登場した鉄器の発明者トバル・カインは遥かに古い時代の人間だ。ノアからアブラハムまでが10代で今から約4400年前、さらにアダムから7代目のトバル・カインはノアより3代は古い人物で約5000年前まで（聖書記述概算）遡る。ピラミッドも箱舟もバベルの塔も鉄器があったからこそ可能なはずだ。日本では鉄の普及は10世紀前後だが、それに伴い武士が台頭、大土木工事が可能となり平地の“平城”から石垣と天守閣を備えた近世の城へと移行、さらに農工具の発展により大幅な作物の増産が可能となり、豊かな農業文化を育んだ。鉄あればこそその文明であり、聖書は科学的に優れて筋道が通っている。一方で人間は、映画で見る如く神に背を向け己の技術や知恵に慢心し、破滅への道を何度も辿った。現在もそうである。聖書には

「信仰によって、ノアは、まだ見ていない事柄について神から警告を受けた時、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。」ヘブル人への手紙 11 章 7 節

とある。信仰とは、“まだ見ていない事柄について” 神を信頼することである。聖書でも映画でも割と凡人に描かれている彼が正義を相続出来たのは、彼が偉いからでも成功者だからでもない。神を信じたからである。映画では描かれていないが、実は箱舟には誰もが無料で乗れた。つまり人々は警告を無視し自ら進んで乗らなかった。“信じなかった” からだ。現在もそうである。誰もがキリストを信じれば、無料で救われ永遠の命が保障される。しかし信じる者は稀である。つまり箱舟はキリストの救いを表し、やがて来るべき最終的裁きへの警告なのだ。さあ、キリストの箱舟に乗ろう。

2014-5-29

